



TITLE:

宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭随筆 :
協會"紀要"のことなど

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭随筆 : 協會"紀要"のことなど.
天界 1941, 21(239): 137-139

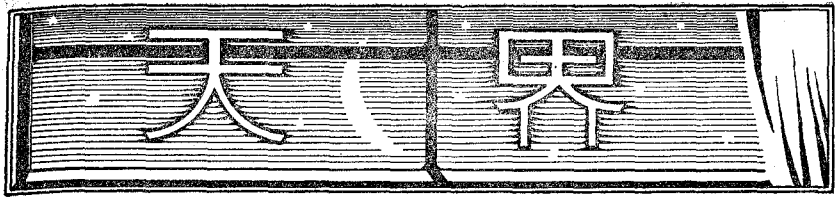
ISSUE DATE:

1941-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168172>

RIGHT:



第239號 (第 21 卷)

(昭和16年) 5 月 號

卷頭

宇宙を觀る，人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

〔協會“紀要”のことなど〕

別の頁にも書いた如く、今回“紀要”(Memoirs)といふ研究文を本會出版部から出すことにした。一體、讀者の中には、本誌を單なる通俗雜誌だと考へてゐる人があるかも知れないけれど、ほんとうに學術の内容のよくわかる人々は知つて居られる通り、本誌の記事の中には高尚な研究論文や觀測報告も多いのであつて、従來は、こうした部分を“Bulletin”といふ形に編輯し直して、それを主として諸外國の天文臺等に送つてゐたのであるが、近來社會狀勢の變動と、印刷や用紙の統制のため、此のブレテンを一時見合はすの止むなきに至つた次第である。しかしながら、時局柄にも拘らず、喜ばしいことにも、本會員たちの天文研究は益々盛んであつて、良い研究報告もドシタタ出るものだから、學術進歩の上からも、國威の發揚の上からも、これ等の貴重なる研究を埋もれたまゝにして置くのは惜しいと思ひ、“紀要”を出すことにしたのである。この序でに、又、本誌の創刊以來、立派な研究として、本誌上に載つたものに、番號を付け直して、やはり此の新しい“紀要”の一部と認めることにした。別項を見て下されば、今までにも、如何ほどのものが出てゐたかが讀者にも分ると思ふ。

すべて、天文學は世界的なもの、國際的のものである。故に、天文學の研究結果を、一私人や、一民族が私有してゐるのは、決して善いことでなく、むしろ其れは學術の進歩發達を妨げるものである。本會が創立以來率先して Bulletin を出版したのも此の意味である。國內の他の學會などが其の後だん々本會の眞似をしてブレテンや歐文報告を出すやうになつたことを見て貰ひたい。

本誌の一部を“國際化”する目的は、即ち、外國の専門家に理解される程度に歐文を入れるにある。(外國の通俗天文家を相手にする餘裕を吾々は持たない。)それについて、英文か、獨文か、又は佛文を用ゐたいのであるが、しかし、

餘り亂雜になるのも皆が迷惑するわけであるし、英文ならば邦人にも讀んで頂ける人が多い現状であるから、少なくとも、當分のうちは英文を多く用ゐることとする。しかしながら、本文は、全く歐文を知らない人々にも充分に理解して頂けるやうにしなければならぬので、編輯には苦心が要る。但し、從來にも本會のブレットンは邦文と英文とを併用して、内外人に充分満足して讀んで貰つてゐたのであつて、其の成果は、既に知る人ぞ知るである。

今後は、本誌は日本内地や東亞一帯のみならず、ひろく諸外國の重要な天文臺に送られて、學術報國の一端を實現するわけである。尤も、しかし本會の經費が急激に膨脹するのは迷惑であるから、今直ぐには、先づ外國の約50ヶ所の天文臺へ送りたいと思つてゐる。——若し、今少し早く此うした國際化に乗り出したのだつたら、一昨年 of 火星面觀測結果についても、本誌 237 號にあるやうな伊達氏から今更スライファ博士に手紙など送る必要は無かつたのである。又、この本誌の“國際化”を愈々決心せしめた動機の一つは本誌第167頁にあるトロントの天文臺のミルマン博士の手紙である。見る目のある人は此ういふ風に吾人の研究價值を見るのだから、決して遠慮するには當らないのである。

▲紀州南部に滞在中、いろ々々の訪問者を受けたが、中に棕平君がやつて来て、同君獨特の光弧の説明をきいた。案に相違して、同君の眞面目な學術研究の態度に尊敬を拂はざるを得ないと同時に、こうした新しい研究方面の開拓に當り、世人（殊に、世の官僚學者）が、如何に之れを白眼視し、虐待するかを、眞實に見せつけられて、氣の毒に堪へない。次號に載せる同君の文なども、東京の或る學者が、初め禮を厚うして依頼したものであるのに、出來上つてから俄かに之れを理由も言はずに突き返したものであるといふ。實際、今日の我が日本の官僚學者の中には、禮儀も人情も辯へず、單に物を知つてゐる器械みたいな輩が多いことを慨嘆せざるを得ない。

非常時局の統制經濟時代に入つて、此の頃、都市でも、田舎でも、商人の態度が横柄になり、殆んど“物を賣つてやる”、“買はせて頂く”といつたやうな風潮が多く店頭で見られる狀景だと、嘆いてゐる人がある。自分は此の狀勢を見て、圖らずも、世人に對する我が國の學者の態度を連想する。一體、世人が學者を尊敬するのは良いが、しかし、學者の方から威張つたやうな態度に出ることは大いなる誤りである。外國の學者の、人間味ある、親しみ深い態度は、日本人には珍らしい。何故、我が日本に於いて學者の鼻呼吸が荒いかと言ふと、多くは、學者が官僚だからである。學者の多くは、一般の官吏の惡風を持つてゐて、世人を一段下に見下す心地をする。之れが即ち、學者を横柄ならしめ、又、學問を墮落せしめるのである。今後の新體制時代を考へると、此の誤つた學者の態度を一變して、もつて、國家のため、社會のために、心から奉仕

的な態度を採らしめなければならぬと考へる。——商人の横柄な態度を憤る人はあり、又、近頃は官吏の横柄な態度を憤る人は増して來たけれど、未だ學者の横柄を憤慨する人が世に少いのは、之れは永年の習慣に捕はれて、世人が未だ學者は官僚だといふ迷信を持つてゐるのによるのだらう、困つたものである。

▲戦時に於ける歐洲の學界は、どんなものだらう？ グリニチ天文臺が爆撃されたのは驚くべきことだが、之れには其れ相當な理由があるのだらうと思はれる。先年、南京の紫金山天文臺が日本軍の攻撃的となつたのは、この學術研究府が支那軍によつて砲兵の基地として亂用されたためであるが、グリニチは、英國側があの公園を、やはり、軍事の基地としたがためではなかつたか？ と疑はれるふしもある。

戦争中にも拘はらず、彗星の來往が激しく、學界は忙しい活躍を見せてゐる。殊に、近頃のニュースによると、元のポーランド、フィンランド、ベルギー、デンマーク、フランス等の天文臺や天文學者が、依然として研究につとめてゐるのは感心なものである。戦争圏外に立つてゐる米國や南阿の學者たちが盛んに奮勵してゐるのは言ふまでもないことであるし、ドイツの天文學者も、あの渦中にあつて、勇ましく各々其の職域に活躍してゐる。こうした中にあつて、我が國の天文學者（専門家）が依然として眠つてゐるのは、どうしたものか？！ 慣れない日食の觀測の準備だとか、計畫だとかで、御茶を汚し、今更、遅まきの天文用語談義などに浮身をやつしてゐられるらしいが、かんじんの望遠鏡が全く遊んでゐる現状は、何とかならぬものか？ 之れにつけても、我が國の學界は、アマチュア天文家に大きい期待をかけねばならない。四十年來、吾が國の官僚天文學者は、プチ理論家たるにのみ甘んじて、實地觀測の重要なことを思はず、いくら器械を買ひ込んでも、之れを使はないまゝに放つて置くことになつて了つた。年々出る五人十人の大學天文科卒業者の中から果して幾人の觀測者が現はれたかといふ事實を正視すると、世人は何時までも此の状態を許してはおかないだらうと思はれる。今、東京や京都や仙臺あたりの官立天文臺が一擧に無くなつた所で、世界の天文學界は何の痛痒を感じないだらう。之れに反して、我が國の優秀勉勵なアマチュア天文家が無くなれば、世界には、いくらか、こたえるのである。（紀州の濱邊にて、1941-3-10）

春 の 星

かがり火 照らし出す櫻の うへの星	井 泉 水
五 月 闇 星を見つけて 拜みけり	路 通
苗 代 や にぎやかに見る 星 の 影	子 羽
明 星 や 光 を さ め て 初 霞	成 美